

発達障害の支援Ⅱ

ソーシャルスキル支援の根幹

- 具体的内容の支援プログラム
 - 比喩・暗喩(あいまい語)の使用を避ける
 - 視覚的刺激は具体性を高めるが、本人の認知特性に合わせる
- 社会的行動の背後にある「暗黙のルール」を明確にする
- 異なる環境間で一貫性のある支援体制
- ロールプレイの利点と限界を把握
- 学習したスキルをいかに維持・般化させるかが課題

暗黙のルール

- 直接教えられることは少ない
- 何となくわかっている・ふるまえる
- 民族的・文化的ルール
- その環境(クラスなど)のみで通用するルール

みんな知っていて当たり前と思われているから書かれていない。それを具体的に目に見える形にする支援

ビデオセルフモニタリング

- 自分自身の行動をビデオで見る
 - 支援者が適宜質問・コメントをする
 - 「君はこのときどんな気持ちだった？」
 - 「ここ、君はかっこよかったね！」
 - 「こんなことにならないためにはどうしたらいいかな」
- 自己認知・セルフマネジメントに効果的
- 出来るなら編集し、テロップなどを挿入したビデオクリップを作成
- 子どもが日常的に自分で見られるようにするの
も可

ソーシャルナラティブ

- 目には見えない暗黙のルール、他人の気持ち、振る舞いの結果(見通し)などを具体的に解説
- 一般的に一人称で文章を構成する
- 本人のレベルに合わせて、支援者が**本人と一緒に**作成
- 絵や写真、動画などの視覚的要素も加えると効果的
- ソーシャルストーリーズ™が有名

マンガを使った支援法

- お話形式をよりビジュアル化
- 多くの場合抽象的でとらえどころのない社会的事象を、マンガにより具体化し、理解しやすいように安定化させる
- 基本手順
 1. マンガを描く前に、子どもと会話を持つ
 2. 社会的場面を描く
 3. 大人の考えを言う(主導権はあくまで子ども)
 4. マンガに順番をつけ、整理する
 5. 解決策を共同(生徒が主体)で見つける

ソーシャルスキル支援で目指すこと

- 発達障害の将来的社会自立に関して最大の懸念事項
- 現代社会で発達障害のある個人がサバイバル可能なスキルを支援

日常生活で何が出来ていないのかを日々チェック
見えないルールは見えるように
ヘルプが言えるスキルは重要
ある程度の「ユニバーサルスキル」は役に立つ

個人の感覚特性に応じた環境の整備

- 本人へのアプローチ vs. 周りへのアプローチ
 - 家庭やクラスなど、まわりの人が本人の感覚特性を理解する
 - みんなの行動が制限されない限り、本人の感覚特性を刺激しすぎないように対策を立てる
 - 年齢や発達に合わせて徐々に自分の対処法を増やす
- 基本はストレスマネジメント
- 本人が好きな感覚刺激の供給は本人の安定を保つのに役立つ

ストレス・マネジメント

- ストレッサー
 - 体調
 - 悩み
 - 先が見えない、突然の変化
 - 感覚の敏感性
- パニックに至るまでの段階を発見
 - ABAを利用
- ストレスレベルに合った対処法・先生や保護者の助け・自分で開発
- パニックになった時点の支援は不可能。つまり、パニック以前でのアプローチが必要

ホームベース

- いわゆる自分が落ち着ける場所
- 自宅や学校で、自分が“一人で”落ち着ける場所を確保する
 - 子ども用テントなど、部屋の中でも視覚的にシールドできるものが良い
- イライラし始めたら、またストレスのパターンがわかっていたら定期的にそこで落ち着く
- 自分が落ちつくもの、タオルやお気に入りのグッズを用意しておく

具体的な支援計画の計画と実施

- 複数領域のアセスメント結果から包括的に支援を考える
- アセスメント結果を箇条書きにし、それぞれを以下の3つに分類
 - A. 学習可能なスキル
 - B. ツールが必要な領域
 - C. 環境および人的支援が必要な領域
- なるべく(A)(B)の支援項目を多くするようにする
- 必要以上の支援は避ける

「出来る限り」の早期支援

- 就労期直前、または就労期になってからの生活・就労支援になってしまっている現状
- 基本的な生活スキルの獲得が最優先(つまり、「みんなとうまくやる」、「きちんとした態度を取る」とかではない)
- 自己効力感、自己肯定感というのは、自身が自分の能力を認識してはじめて得られる
 - 成功体験なしには得られない
 - 個人の発達段階、機能レベルに合わせた成功体験獲得プランが必要
